

心身論から人間論へ

From the Body-Mind Problem to An Essay on Man

黒須 俊夫

Toshio KUROSU

1) 心身一如

本学部では、「カラダと心とが常に一つのものであることを考えて、生涯を通して『人の道』を歩むこと」を前提に、「心身を一つのものとしてとらえ、人々が生涯を通じてカラダも心も健康に生きていくために役立つ教育」を実践していると、渡辺剛学部長は述べている(学部長メッセージ)¹⁾。

この「心身を一つのもの」として捉える考え方は、中世の禅僧栄西が唱えた「心身一如」という考え方に通ずるものであろう。しかし、湯浅(1990)によれば、この心身一如という用語は、心身を一つとして捉えるという意味だけではなく、次のように説明する。

『「心身一如」という表現は、心と身体において見出される二元的で両義的な関係が解消し、両義性が克服され、そこから意識にとって新しい展望——開かれた地平ともいえるような——が見えてくる事を意味する。心身一如とは、たとえば舞台でわれを忘れて舞っている達人の演技のように、心と身体の動きに一分のすきもない昂揚した状態である。』²⁾

そしてこれは明らかにデカルト流の「心身二元論」とは異なり、心理学の研究に携わっている筆

者にも十分に首肯できるものである。しかし、私たちのような凡人にとって、この芸の達人のようなハイレベルの心身一如は可能なのであろうか、という疑問が生じてくるが、ここでは、まず、心とからだの関係を「心身を一つのもの」と捉える根拠について考察することを課題としたい。

2) こころの所在

(1) 身体は存在する

身体は、まず物体として存在することから、誰もがその存在を疑うことはない。「我思う、ゆえに我あり」とか「人間は考える葦である」というときでさえも、体という物体、物理的存在を前提にしていることは明らかである。この「物理的」という語に対応する英語は、「physical」であるが、この語の意味は、次のようである。

- 1 (a) of or for the body : physical fitness/strength ○ physical exercise/education/training ○ physical and mental change of old age.
(b) actual ; in person : She was intimidated by his physical presence.
- 2 of or concerning things that can be experienced through the five senses, eg

touch or sight, rather than perceived through the mind or spirit : the physical world/universe.

- 3 of or according to the laws of nature : It is a physical impossibility to be in two places at once. (O.A.L.D.)³⁾

このように、「physical」は、まず、身体の動き (physical exercise : 体操、運動) を指し、次いで、五感で直接触れることのできる世界 (物理的世界) を、そして、自然の法則を表すようになり、physicsで物理学の意と変化したものと考えられる。

このように、人間に関する表現を造り出した先人は、すでに身体的であることは物理的であるというふうに捉えていたことがわかる。しかし、身体は物的に存在し、見えるし触れるのであるが、この身体とは対照的に心理学の研究対象であるところは、残念ながら触れることも見ることもできない。日常用語として、「彼は彼女のこころを掴んだ」とか「こころ無い人」のような表現がよく使われるが、一種のメタファーとして使用しているののである。

そして、ほかならぬこの見えない、触れない、つかめないなどの特徴をもっているところであるが、まだ、今日のように様々な分野の科学が発達していなかった昔、たとえば、紀元前の古代ギリシャ時代には、こころの理解については、さまざまな説が考えられていた。

ギリシャ時代には、まだ、現在のような「こころ」という概念はなく、psycheという言葉が用いられていた。この言葉を訳すと「魂」とか「靈魂」という意味になる。そして、この語は、今日の私たちが考える祖先の「霊」、「靈魂」とか、「魂」が抜けてしまふとかの意の魂の側面と現代の「こころ」に含まれる喜怒哀楽や性格⁴⁾などの側面が含まれていたものと思われる。

いずれにせよ、ギリシャ時代には心はどのように捉えられていたのだろうか。最も古いギリシャ時代のアナキクシメス (BC588-524) は、「すべ

てのものは空気から生まれ、空気へと解体する。その過程で、地水火風などが生じることになる。われわれの靈魂 (psyche) は空気であり、われわれを統括しているように、吹く息と空気が全世界を抱擁している。」⁵⁾ と考えた。

また、ピタゴラスの定理で有名なピタゴラス (BC571-497) は、「悟性は頭に、情意は心臓に、成長は臍に、生殖は生殖器官にある」⁶⁾ と考えていたが、医学の父と呼ばれるヒポクラテス (B.C.460-377) は、「人々は、われわれの快楽も喜びも笑いも戯れも、また苦しみも不安も泣くことも、脳以外のどこからも生じてこないということを知らなければならない。われわれはとりわけ脳によって思考したり理解したり見聞きたりし醜いものや美しいもの、悪いものやよいもの、さらに快不快を知るのである。」⁷⁾ と述べている。そして、哲学者として有名なプラトン (B.C.427-322) は、「理性は丸い頭の中に、勇気、待望、進取性である精気 (spirit) は心臓に、栄養をつかさどる欲望 (desire) は、横隔膜の下、腹部にある」と、体の各部にこころの機能が分散していると考えていた。⁸⁾

人間の感覚としていわゆる五感 (視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚) を認め、歴史上初めての心理学書 (「靈魂論 : デ・アニマ」) を表したとされるアリストテレス (B.C.384-322) は、植物、動物、人間に至る生命活動の根源を「靈魂」で説明しているが、こころの座は心臓にあるとしている。

ガレヌス (A.D.131-201) は、「心身の機能は精気 (spirit) によるものであって、神経は精気の通路であり、脳の中で大切な部分は脳室である。精気には動物的精気 (animal spirit) と生命的精気 (vital spirit) と精神的精気 (psychic spirit) とがあり、食物は胃から肝臓に行つて動物的精気となり、それが血液となって心臓に行つて空気とふれて生命的精気となり、それが脳に行つて精神的精気となる。それがすなわち靈魂である。」⁹⁾ と述べ、精気イコール靈魂であると論じている。

このように古代ギリシャのこころの所在につい

での思想は、人間とは何かという哲学的視野の中で考察されていたが、その多くは、今日の素朴心理学にも通ずるものといえよう。

さて、わが国においてころという用語が最初に現れるのは、万葉集（A.D.347-759）で、全4516首のうち、240首にころということばが使われている。万葉集はすべて漢字を使って表記されているが、ころに当てられた漢字は、情と心、意、神、景迹、於、許己呂、己許呂、許許呂、己己呂等であった。その意味の使い分けがあったかどうかは不明であるが、すでに4世紀には「ころ」という音が心などの意味を示すことになっていたことは興味あることである。また、古事記（A.D.713ごろ）にも「意富岐美能 許々呂袁由美 淤美能古能 夜幣能斯婆加岐 伊理多々受阿理」とあり、「ころ」との音の表記として「許々呂」という漢字が当てられている。この句の読みと意味は次のようである。

「おおきみの ころゆるみ おみのこの やえのしばがき はいりたずあり」

「皇子さまのころがしっかりしていらしゃらないので、私の家の幾重にも嚴重にめぐらした芝垣の中には、おはいりになれないでいらっしゃる」¹⁰⁾

しかし、わが国では、ころの内容について万葉集や古今和歌集やその他の古典文学のなかに表現されているものの、ころの仕組みなどの考察は、空海（774-835）の「十住心論」や道元（1200-1250）の「正法眼蔵」といった仏教思想の中で行われてきたと推測できるが、これらについては現在の筆者の力をはるかに超えるので、稿を改めて論じることにはしたい。

(2) ころは存在するか？

下記のような選択肢をつけて、筆者が担当した心理学の受講生に聞いてみた。結果は、図表1にあるようにころの所在は、様々である。これは、2010年の調査の結果であるが、筆者は、1995年からほぼ毎年、心理学の受講生に対してこのようなアンケートをおこなっている。胸と心臓、頭と大脳、その他を一つにまとめたものを図表2に載せてある。

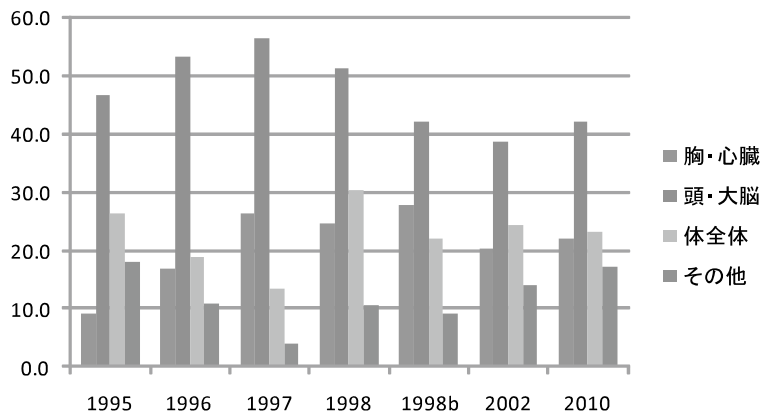
これらの図表から、「頭・大脳」が毎年いちばん多く、次いで「体全体」と「胸・心臓」が拮抗し、その他は、1998年以降増加傾向にあること

図表1 ころの所在（2010年）

Q1 「ころ」はどこにあると思いますか。

	人数	%
1) 胸	34	9.7
2) 心臓	24	6.9
3) 頭	66	18.9
4) 大脳	82	23.4
5) 体全体	83	23.7
6) その他（具体的に）	52	14.9
7) その他のうち（ころは無い）	9	2.6
	350	100

図表2 心の所在（1995～）



*2010年は、国士舘大学2,3年生（350名）、1998bは、学生の家族など一般の方（1110名）、それら以外は群馬大学1年生で毎回200名前後。

がわかる。一般と学生との間にほとんど差がないこともわかる。

心理学の対象としてのところがこのように様々なところにあるとすれば、心理学者たちは、どのようにしてところを研究するのだろうか。そのことを考える前に、これらの選択肢を選んだ理由について見ておこう。

1～4の「胸、心臓、頭、大脳」は、私たちが日々「ところあたり」がある事柄であり、特に、感情的な経験が主な理由となって、そのままところの所在と考えていると思われる。5の「体全体」

は、個々の臓器にあるとは考えられないことや、感覚器官が「体全体」に分布していることなどから体全体にあると考えている。6の「その他」では、体のどこにあるかは分からないが、どこかに、たとえば、自分と他人との間にあるとか、自分と関係するものに存在すると考えている。そして、7の「こころは無い」では、こころは物体ではないし、物理的には存在しない、という主張から、「こころは無い」と断定してしまっている。

このように、こころは個々の臓器にあるという考えから物理的にはないという考え方まで多様に

図表3 ところの所在とそう考える理由

-
- | | |
|---|---|
| <p>1. 胸：○好きな人を見たら胸がドキドキする○胸が熱くなる○胸がキューンとなる○心配するときは「胸を痛める」、感動したときは「胸を打つ」と表現するから。</p> <p>2. 心臓：○こころの漢字は「心」で、心臓を意味しているし、英語でもこころはheart（心臓）を意味するから○心臓が止まると生きていけない○好きな人に会った時には心臓がドキドキする○楽しいとき、うれしいときには、心臓がバクバクしていることを感じるから○自分の体の中が透けて見えると仮定する。そこに見える心臓、肺、胃などのすべての内臓を取り除き、筋肉も骨も顔も脳も取り除く。そうすると最後に残されたのは自分の体の輪郭とこころだけである。こころの所在は、その中心あたり、つまり、心臓あたりにあると考える。</p> <p>3. 頭：○頭で考える○頭を使う○頭にあると考えたのは、人間の中心的な機能をもつ脳があるからだ。こころとは、考えたり、感じたり、また精神的な活動をする場所だと考える。</p> <p>4. 大脳：○大脳が司令塔、大脳が働いて心ができる○何かを見ているとき、体験をしているとき、いつでも脳で判断されて行動や表情に表されるから○一般に「こころ」と「からだ」に人間を分割して考えることがある。「こころ」と「からだ」に分割できるものならば、「こころ」は「からだ」と異なるものであると考えられるが、本当にそうだろうか。私は人間の内面、つまり、精神機能を司っているものが「こころ」、物体としての人間を構</p> | <p>成しているものが「からだ」であり、「体の諸器官」であると考えている。大脳皮質の働きにより、人間の内面の変化が常時起こっていることを合わせて考えてみると、「こころ」ははっきりとした形状を保たないけれども、体の一器官の脳に支えられて、人間が人間であるための必要な機能を果たしていると考ええる。</p> <p>5. 体全体：○こころは体全体にあり、体全体が受容器だから○考えるのは脳だがそれが現れるのは体全体○体全体の頭のうえにはぼんやりとしてある。○「こころ」とは周囲の状況、できごとにより、何らかの変化を絶えず受け続けるものである。変化とは、いわゆる喜怒哀楽に加え、苦痛などの身体的な変化も含まれる。外からの信号を処理する器官は脳であるが、われわれがふだん感情を覚えるのは頭部だけではない。胸部、腹部、あるいは手足なども感情を体感する部位であるということは経験的に理解できる。また、逆にストレッチやヨガなど身体の方から「こころ」に働きかけることも可能である。したがって「こころ」とは人間の身体と同一であると考ええる。</p> <p>6. その他：○体内のどこかにある○自分と自分に関係する人、ものにある○他人との間にある○生きてきた自分のすべての中に○具体的な場所はない○主体（人）と物や人との繋がりの中にある。</p> <p>7. こころは無い：○こころは物理的に無い○こころは物体ではない○目に見えない。○こころは、考えるときにしかない。</p> |
|---|---|
-

理解されている。

この調査と同時に、筆者は、「魂」とか「靈魂」が存在すると思うかという質問をしたところ、約半数が「魂は存在する」と回答している。わが国でも民間信仰（祖先崇拜、靈魂信仰）などで、人間の魂は人間の肉体が死滅しても肉体を離れて存在すると考えられているものであるが、「ころ」についての本格的な学習をするのは大学生になってからという現実を反映しているものといえよう。

(3) こころの定義

(a) 辞書におけるこころの定義

日本の代表的な国語辞典では、こころはどのように定義されているのであろうか。以下にみるように、「精神作用のもとになるもの（広辞苑）」、「精神活動をつかさどるものとなるもの（大辞林）」、「精神機能をつかさどる働き（国語大辞典）」、「知識・感情・意志などの働きのもとになっているもの」というように、いずれも精神現象を引き起こす根源の存在としていることが特徴である。ただ、国語大辞典では、(1)の後段で、「あらゆる精神活動のもとになるものと、また、そうした精神活動の総称」とされていて、こころは精

神活動全体を指すことが示唆されている。そして、おもしろいことに心理学事典（平凡社、1957）には、「ころ」の定義は見あたらない。

図表4に示してあるように、こころを説明するのに、いきなり「精神活動、精神機能、精神作用」という用語がでてきているが、この精神という語を辞書でひもとくと、①（物質・肉体に対して）心、意識、たましい。②知性的・理性的な、能動的・目的意識的な心の働き、とある¹⁰⁾。どうせなら、精神は心と同義であることを断っておいてほしいものである。こころが精神と表記される理由は、こころはもっとも小さい（細かい）神（魂、靈魂）が人間の誕生とともにどこからともなく神経（神の通る道）を通して体内に入り、その人の生命の火が消えたとき体内から外界に出て世界を浮遊するという原始的な考えに基づくものであると推測できるが、いずれにせよ、精神は知識・感情・意志など全体を指し、「ころ」と同じであるということになる。

さらに、こころは、「人間の精神作用のもとになるもの」という説明では、「こころは人間の心の作用のもとになるもの」となり、トートロジーであるので定義にはふさわしくないであろう。また、「もとになるもの」という表現と「①知識・感情・意志の総体」という表現も矛盾するものとなっている。このように、上記の辞書はいずれも混乱しているように見受けられるが、「精神活動の総体」もしくは、単純に「知識・感情・意志の総体」をこころと呼ぶとまとめておくべきだろう。

(b) こころの正体

なぜ、わが国の著名な辞書でも明確にこころを定義できないのであろうか。その理由の一つには、こころの特徴にもとめることができる。それは何よりも「こころは見えない」ことによるのである。空気だって見えないではないか、という反論も出されそうだが、空気の成分は、窒素（N₂）、酸素（O₂）、アルゴン（AR）、二酸化炭素（CO₂）などの元素からなっていることが確認されている

図表4 辞書による「こころ」の定義

〈広辞苑（第六版）〉 岩波書店 2008 p.999

①人間の精神作用のもとになるもの。また、その作用。

①知識・感情・意志の総体。

〈大辞林〉 三省堂 1988 p.865

①人間の体の中にあって、広く精神活動をつかさどるものになると考えられるもの。

〈国語辞典〉 小学館 1982 p.918

一 人間の知的、情意的な精神機能をつかさどる働き。
(略) 精神。魂。①人間の精神活動を総合していう。

(1) 人間の理性、知識、感情、意志など、あらゆる精神活動のもとになるもの。また、そうした精神活動の総称。

〈日本語大辞典〉 講談社 1989 p.695

一 ①人間の知識・感情・意志などの働きのもとになっているもの。精神。mind。

し、光の透過度が高く肉眼では全く見えないが、身体では、風としてその移動を確認できるのである。空気は物質である。では、ここは物体か。

このことを明らかにするために幾つかの例を示そう。まず、次にあげる単語を読者に読んでいただきたい。

1. サンマ
2. 自動車
3. トンボ

では、サンマという語を読んで、読者は、どんな姿のサンマを思いだしただろうか。自動車、トンぼについても同様である。

おそらく、読者が思いだしたサンマや自動車は、読者から見てサンマの頭や自動車のフロントは左側を向いていたことだろう。これに対して、これまでの調査ではトンボは頭が上だったり、左／右だったり、下を向いていたりして、バラバラである。

さて、読者が思い出した「もの」は、いったいどこにあるのだろうか。

サンマの場合、スーパーの発砲スチロールの白い箱の氷水に入っているサンマ、身が2つに切られて網に載っている姿、あるいは、白い皿のうへに頭を左にして列べられ、焼かれたサンマに大根おろしが付けられている姿、などなど、まさに、人さまざまに思い出されるのであるが、いったい、これらサンマや自動車やトンボなどは、どこにあるのだろうか。

もし、仮に「頭の中にある」と考えてみよう。すると、大脳や間脳などが詰まっている頭のどこに30cmもあるサンマが「いる」のだろうか。「自動車」の場合には、なおさら困難なことになろう。

これは、「サンマ」という語を読んで、思い出したサンマを「物質」と考えた場合の問題である。心理学では、思い出したり、目の前の物を見えているという時に生じている映像を「表象とかイメージ」と呼んでいて、実物のサンマ（物体）について情報処理をすることによって「見えるようになったもの（物体ではないもの、something）」

であると考える。

この表象は、実は、上に上げた3つの語にだけあてはまるものではなく、私たちが使用しているすべてのことばについて同じことがいえるのである。

読者が、「お母さん」「お父さん」「ごはん」「弁当」「リンゴ」「ラーメン」「小遣い」などという時、一瞬のうちにそれらのイメージを呼び出しているのである。つまり、ことばの本質的な働きがそうさせてくれるのである。

私たちがふだん日常的に行っている新聞を読み、テレビを見、家族や仲間と会話する時、ほとんど具体物・実物・物それ自体から離れて、それらのイメージを扱っているのである。むろん、ことばを介した知的な側面だけではなく、ここには、感情や欲求といった側面も含まれる。次に「心身一如」の出発点である、人間のこころの誕生の過程を見ておこう。

3) 体から「心」へ

(1) 受精から誕生へ

人間のこころは、いつから存在するのかという問題は、人類史という視点から論じること重要であるが、ここでは、いわゆる個体発生という人間の受精・誕生という発達の過程におけるこころの発生という視点から考察する。

しかし、この問いに対する回答は、そう簡単にはできるものではなく、難しい問題であり、「こころ」をどう定義するかによっても異なってくる。ただ、受精前の卵子と精子のそれぞれに「こころ」があると考えerには無理がある。この時期は生命をもつ一つの細胞としか形容できないからである。すると、個々人のこころは新たに形成されるという視点を導入することが必要となろう。では、受精後のいつ頃から心が形成されるのであろうか。このことを考えるために、次に、受精細胞の変化を見ておこう。

人間の最小の細胞といわれる精子（0.05mm～

0.06mm) と最大の細胞の卵子 (0.13mm ~ 0.2mm) が卵巣と子宮のブリッジと呼ばれる卵管の膨大部で結合 (受精) され、およそ1週間かけて、子宮内に着床する。胎児は、母親の子宮のなかで約10ヶ月間過ごす、この間の主な変化を挙げておく¹¹⁾。

このような過程を経て誕生した赤ちゃんは、産声をあげ、目が見え、音が聞こえ、温度を感じたり五感を働かせることができるが、4頭身の体型

図表5 受精後の胎児の発達

①受精卵・胞胚期 (受精後1~2週間)

2細胞から4・8・16・・・と細胞分裂を繰り返し、子宮に着床する。

②胎芽期 (受精後2~7週ごろ)

体の各器官の形成が開始される時期。

脳 (1.5~11週)、目 (2.5~7週)、心臓 (2.5~7週)
手足 (3~8週)、歯 (5~10週)、腹部 (8.2~9.5週)
(頂尾長 (身長)・体重)

* 頂尾長 (頭頂からお尻の先端まで (座高) の長さ
第4週 (6mm・0.01g)
第5週 (8mm・0.02g)
第6週 (12mm・0.04g) : 目は黒い色素の点状態なる
第7週 (17mm・0.07g) : 目が黒くはっきりしてくる。

③胎児期 (8週から誕生まで)

この時期以降を胎児と呼ぶ。

第8週 (23mm・1g) : 手の指の形が完成。頭部と胸部が明確になり、その間に頸部を識別できる。お尻のしっぽのような突起が消える。

第9週 (30mm・7g) : 頭部が直立し、顔の形も完成する。

第12週 (56mm・14g)

第14週 : 皮膚が赤みを帯びて不透明になり、顔面に産毛が発生する。

第18週 : 頭の長さが体の3分の1となり、頭髮も生えくる。

第20週 (160mm・310g) : 子宮の中で活発に動く。胎動。

第38週 (350mm・3300g) : 出産を待つばかり。

出産 : 頭を先にして産道を数時間かけて胎外へ、誕生である。

で、頭でっかちの姿である。子馬、子牛は生まれた子の姿をそのまま拡大 (成長) すれば親の姿になるが、人間の場合、「子おとな」ということはできず、おとなと同じ体型になるには、13~14年以上かかるのである。

誕生直後の赤ちゃんは、原始反射という反射的行為を行うが、それも生後3ヶ月頃から現れなくなり、その代わりに自律的意図的な行為が発生してくる。

まだ、ことばも話せない、ハイハイすることも歩くこともできないこの時期の赤ちゃんに「ころ」があるといえるだろうか。

(2) 体の諸相

加藤¹³⁾ は、誕生後の赤ちゃんの体の状態を観察し、コミュニケーションという視点から見て体がさまざまな独特な機能を保っていることを明らかにしている (図表6参照)。

こうした体の状態から、1) からだを超えたところの世界、2) からだから離れることができるころ、が発生する過程を説明している。図表6の「身体の諸相」は、身体の働きもしくは状態を示し、「心理学的問題群」には、それぞれの身体的特徴が働くときに生じる心理特性がまとめてある。「関連する心理学理論など」には、そのことを指摘したり提唱した研究者や理論が紹介されている。おそらく胎児の時にもその後半の時期にはこの図のなかのいくつかの身体的状態を感じていたと思われるが、「モノとしての身体」「場所としての身体」は、誕生後は体内ではなく、社会という時間・空間に位置し生活することになる。からだはまさに物質・物体であり、物理的存在であるが、同時に、生まれた瞬間から明白に他者の存在とのかかわりあいのなかで、「響き合う身体」「緊張する身体」「活動する身体」「表出する身体」として機能することになる。こうして体は物体であると同時に人間的文化的交流の手段として意味的な関係を深めつつ、このころの誕生へと動き出したのである。

身体活動という点では、生後1年前後で直立歩行ができるようになるが、箸やスプーンを正しく使うという細かい行為の発達はずっと後になるし、ことばの獲得、つまり、話せるようになるには、生後2年ほどかかるのである。いずれにせよ、赤ちゃんには、「這えば立て、立てば歩めの親心」ということばに代表されるように、周りから、社会からさまざまな要求（達成課題）が提示されることになる。身体としての赤ちゃんは、五感を駆使しつつそうした親や周りの人の要求に応えようとしてけなげな努力を開始するのである。ことばを話せない赤ちゃんのコミュニケーションは、最初は、「響きあう身体」として、誕生直後から見られる舌だし反応などのように母親の行為に共鳴し、保育園などで他の赤ちゃんが泣きだすと自分も泣きだすというような情動の伝染を示し、まさに体とところが一体となっている様相を見せてくれる。こうして外からの刺激や要求に応えるなかで、5ヶ月頃から「じっと物を見つめたり」「人見知り」をはじめたりするが、これは「緊張する身体」であって、共鳴とか共振とかという他者との無条件の融合とは違って、自と他の区別の開始の時期でもある。そして、8ヶ月頃から「指さし

行動」が現れてくる。これは、「認識の共有」という人間のコミュニケーションの本質への第1歩でもある。つまり、赤ちゃんと母親の間で、「(赤ちゃんが)物を見ていてその名を聞いて、その物を見ながら、その名を言う」¹³⁾ ことができるとき、そこには、赤ちゃんと母親の間に共通のテーマ(わんわんなど)が存在しているのである。これは、換言すれば、ことばでのコミュニケーションの発生でもあり、社会的知識との対峙でもある。しかも、指さしという身体の動きが「こころ」そのものの内容を示しているのである。

こうして、体は歴史的・社会的文脈のなかで、自己の行為を意味づけし、約2年間という時間的・空間的経過の中で、社会との関係を切り結びながら、こころを胎動させているのである。こうして、体とこころは一体という状態から、それぞれ固有の機能を発達させていくことになる。そのこころの形成の背後には、1) コミュニケーション過程があり、2) そのコミュニケーションを通して、社会的要求を絶えず要求し続ける大人たちがいるのである。

さて、こうしたこころと体であるが、冒頭で問題にした「心身一如」を説明するにはまだ不十分

図表6 コミュニケーションの視点からみた身体の諸相

身体の諸相	心理学的問題群	関連する心理学理論など
モノとしての身体	ベイベネス、解発刺激特性	比較行動学
場所としての身体	パースペクティヴ性、志向性	ユキユスキュール、ブレンターノ
響きあう身体	情動感染、間身体性、エントレインメント(引き込み)	ワロン、トレバースン
緊張する身体	自己塑型性	ワロン
活動する身体	感覚運動的活動、対象的活動、アフォーダンス	ピアジェ、活動理論、生態心理学
表出する身体	感情表出、社会的参照	イザード
文化としての身体	所作、パーソナル・スペース	文化心理学、ブルデュー、ホール
エロスの身体	愛着	フロイト、ボウルビー
傷つき病む身体	傷つきやすさ(ビュルネラビリティ)、自傷行為、拒食症	臨床心理学、レヴィナス
老い、死する身体	世代継承性	エリクソン

である。以下では、最新の心身論を展開している研究を参考にもう少し深く考えてみよう。

4) 心身論の課題

「心身論」について論じようとするとき、その出発点は少なくともデカルト、スピノザ、ライプニッツ、といった心身二元論の提唱者たちの見解から説きおこすことが必要であろうし、巻末の参考文献に挙げた心身論に関する代表的な論文についてまず考察することが不可欠であろう。しかし、本稿は、筆者の心身論へのアプローチの序論という位置づけであることから、こうした文献的研究も行い、かつ、東洋的な思惟の成果をも取り入れ、もっとも総合的に論を展開している湯浅（1990）の所論を紹介しつつ考察することにした。

(1) 心身の二重構造

湯浅は、近年の生理心理学や神経心理学、深層心理学の知見を取り入れながら、身体と心は、ともに、表層的構造と基底の構造という二重構造を

もっていると捉える。図表7に示すように、身体を、四肢（手足）の部分と内臓の部分に分ける。その根拠は、自らの意志でコントロールできるか否かということにある。ここでも同様に自らの意志に基づいて生起するかどうかという点から、意識・無意識に分けられる。意識は、感覚・知覚と思考、そして感情の3分野に分ける。このうち感覚・知覚と思考は脳皮質が関与し、感情は辺縁系などの皮質下中枢が関与している。さらに、この感覚知覚には、内部感覚という体内から生じる感覚があり、これは、四肢の運動感覚と内受感覚という2つの異なる感覚で、前者は外界感覚神経と運動神経を介して意識にのぼるので皮質が関与し、後者は心臓その他の各器官に分布した内需容器である内臓感覚神経を通じて意識にのぼる。「意識にのぼる」ということは脳皮質が関与しているのであるが、内臓感覚が関与する皮質空間はかなり少ないこと、そこで扱われる情報は漠然としていて、どの内臓のどの部分からの情報であるか判別ができない、つまり、極限感に乏しいのである。これに対して運動感覚は、手や足に触れ

図表7 身体と心の二重構造

<身体>

四肢：運動器官（随意筋）：自由意志
：体性神経遠心性回路＝大脳皮質運動野

↑ ↓

内臓：生命維持基礎的活動のための器官：意志から独立（不随意筋）
＝自律：自律神経：皮質下中枢（大脳辺縁系、脳幹から延髄）

<心>

意識（明るい部分）

感覚・知覚：（随意＋不随意）：大脳皮質感覚野

↑ ↓

内部感覚の知覚：四肢の運動感覚

：内臓感覚（深部感覚）＝情動

思考：（随意＋不随意）：大脳皮質連合野＋前頭葉

感情：（不随意）：辺縁系、視床下部

無意識（暗い部分）：情動によって強く色づけられたコンプレックス
過去の記憶と結びついた深い根の部分

るものが足の裏かつま先かなどかなり厳密に特定することができる。つまり、極限できるほど情報
が豊に送信されているのである。

この点を湯浅（Pp.249-250）は次のように説明する。

「心理面からみて注意すべき点は、この内臓感覚が情動作用と深く関係しているということである。（中略）間脳や辺縁系に代表される皮質下中枢は、自律神経作用の中枢であると共に情動作用の中枢でもあるから、内臓感覚が情動作用と関連し合うことは当然である。深層心理学は、これらの神経生理学的発見がなされる以前に、ヒステリー発作とか不安神経症などの臨床的知見から異常な内臓感覚と情動不安定が結びついてあらわれることに注目していた。近年における神経心理学の進歩が、深層心理学的研究の正当性を裏書きするに至ったと言ってよいであろう。」

かくして、皮質下中枢と大脳皮質との連結路が確認されたことになる。この上で、無意識の領域を設け、「無意識過程の主役が情動であることは疑い得ない。（湯浅, p.252）」と無意識が関与する情動の役割を重要視するのである。以上のことから、湯浅は、身体の二重構造と心の二重構造を組み合わせ、「心身関係の二重構造」を提起して

いる（図表8参照）。

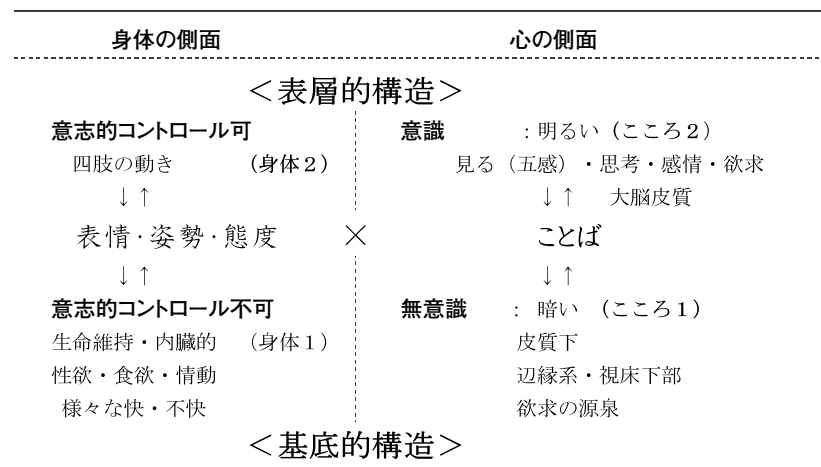
図表8は、湯浅の所論を筆者なりにまとめ、図示したものであるが、上段が身体と心の「表層的構造」であり下段が「基底構造」である。この2つの構造の区別は重要であるので、湯浅の所見をそのまま引用しよう。

「まず、大脳皮質に中枢をおくいわゆる感覚－運動回路としてとらえられる身体部分（すなわち四肢）と、機能的にこの回路に結びついている外界知覚と運動感覚（体性系内部知覚）および思考作用からなる「意識」の主要部分がある。われわれはこれを心身関係の表層的構造とよぶことにしよう。この表層構造は、感覚－運動回路に伴う「明るい意識」を通じて自己と世界を関係づけているものであり、哲学的に言えば、日常経験の場における「世界内存在」として人間の存在様式の表層を形成している。ベルグソン、メルロ＝ポンティ、フッサールらの身体観は、すべてこの表層的構造を基本にして考えられたものである。（P.252）」

そして、さらにこの表層構造の根底に「心身関係の基底構造」を設定し、次のように説明する。

「それは自律神経系に支配される内臓諸器官と機能的にこれと結びついている情動および内臓感覚（原始感覚としての自律系内部知覚）の関連の

図表8 心身関係の二重構造



構造をいう。心理面かみれば、この基底構造は、感情という形で、意識（つまり皮質）のレベルにその一部があらわれているが、その大部分のはたらくは明確な判別が不可能な無意識領域に沈んでいる。それは「明るい意識」の底にかくれた「暗い意識」を形成している、また、生理面からみると、この部分は、生命体の存在を維持する基礎的機能を営んでいるものである。（p.252-253）」

このように、基底構造（明るい意識）と表層的構造（暗い意識）の上で、身体とところのそれぞれの2側面が複雑かつ総合的な関係の中で経過して私たちの日常生活が営まれることになるが、ふだんは、この心身関係の基底構造は姿を現さない。基底構造すなわち「この明るい意識の低層に潜在している「暗い原始的意識」が表面にあらわれてくるのは、夢・催眠・神経症・精神病といった非日常的な、その意味で“異常な”限界状況においてである。（p.253）」

このように、これまでいわれてきたところの動物に共通するいわば古い脳と人類を人類たらしめた新しい脳とが歴史的文化的環境のもとで複雑にかつ多様に、そして無限ということばそのままではまる私たち人間の個々人の生活過程の理解は、さまざまな科学の進展のなかで少しずつ発展してきているといえよう。

（2）今後の課題

紙数も限られていることから、湯浅の所論についての詳細な検討は別の機会に行うつもりであるが、一つだけ「心身論」の限界について触れておこう。仮に、図表8にまとめたように心身関係がこうした構造に従っている、もしくは、このような枠組みでのみ解明できるとしても、なお、「人間の理解」という視点から見ると全く不十分であろうと言わざるを得ない。身体があって、生命があって、その上ところがあって私たちの生活がふだんに営まれているのであるが、「過去」の記憶に左右されつつ、各自が設定した「未来」をみつめつつ日々生きている人々のリアルな姿という視点

が抜けているのである。つまり、図表8で言えば、表情、姿勢、態度、そしてことばの一切が「社会的産物」であり、身体のあり方、こころのあり方の一切が「歴史的・文化的産物」として機能しているという事実である。すくなくとも「こころ」から社会を、歴史を分離すれば、そこには「人間」という存在は、存在しなくなるのである。

筆者は、こうした総合的な人間論への1ステップとしての「心身論」をとらえ、検討して行くつもりであるが、まず、この湯浅の所論と巻末の参考文献に挙げた諸家の知見、さらには、精神分析学派と異なって科学的に情動のメカニズムについて考察しているフランスの心理学者ワロン（Wallon, H.）らの所見との比較検討を行うつもりである。

参考文献

- 1) 渡辺剛 「学部長メッセージ」
Url: http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/PE/outline/040000_0012.html (2011年1月アクセス)
- 2) 湯浅泰雄 身体論——東洋の心身論と現代——講談社 1990 p.25-26
- 3) Oxford Advanced Learner's Dictionary. Oxford University Press UK 1995
- 4) テオプラストス 森進一訳 人さまざま 岩波書店 1982
- 5) 坪田歆一編 現代教養百科 暁教育図書出版 1967 p.30
- 6) 今田恵 心理学史 岩波書店 1962 p.20
- 7) Hippocrates 大槻真一郎翻訳編集責任 ヒポクラテス全集 第2巻 エンタープライズ 1987 P.128
- 8) 今田恵前掲書、p.29
- 9) 同上、p.45
- 10) 古事記 上代歌謡 日本古典文学大系1 小学館 1979 p.334
- 11) 新村出編 広辞苑 第6版 岩波書店 2008 p.1544
- 12) 鈴木秋悦 「新しい生命のはじまり」ニュートン教育社出版 1982
- 13) 加藤義信 「コミュニケーションとからだ」心理科学研究会編 心理科学への招待 有斐閣 2004
- 14) 久保田正人 「言語・認識の共有」講座現代の心理学5 認識の形成 小学館1982 p.210

参考文献

- 1) 春木豊編著 身体心理学 川島書店 2004
- 2) 廣松渉 心身問題 青土社 2008
- 3) 市川浩 精神としての身体 勁草書房 1975
- 4) 市川浩 〈身〉の構造 講談社 1993
- 5) 市川浩 (中村雄二郎編) 身体論集成 岩波書店 2001
- 6) 池田善昭 心身関係論 晃洋書房 1998
- 7) 黒須俊夫 メディア人間論 (1) メディア人間の台頭 群馬大学社会情報学部研究論集 第10巻 2003
- 8) 黒須俊夫 メディア人間論 (2) 道具とメディア人間 (1) 群馬大学社会情報学部研究論集 第11巻 2004
- 9) 黒須俊夫 メディア人間論 (3) 道具とメディア人間 (2) 群馬大学社会情報学部研究論集 第11巻 2005
- 10) 長崎大学生涯学習教育研究センター運営委員会編 身体論の現在 大蔵省印刷局
- 11) プリースト, S. 心と身体の哲学 河野哲也・安藤道夫・木原弘行・真船えり・室田憲司訳 1999
- 12) 坂本百大 心と身体 岩波書店 1986
- 13) 竹内敏晴 思想する「からだ」 晶文社 2001
- 14) 種村完司 心ー身のリアリズム 青木書店 1998
- 15) ヴァルデンフェルス, B. 山口一郎・鷺田清一監訳 講義・身体の現象学 知泉書館 2004
- 16) ワーチ, J.V. 佐藤公治・田島元信・黒須俊夫・石橋由美・上村佳代子訳 行為としての心 北大路書房 2002
- 17) ワロン, H. 久保田正人訳 児童における性格の起源 明治図書 1965
- 18) ワロン, H. 滝沢武久訳 精神病理の心理学—異常心理と正常心理の弁証法的把握— 大月書店 1965